

令和3年度入学試験問題（一般選抜：追試験）

小 論 文

（中等教育教員養成課程）

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること。

〔1〕 つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

学校で身につける力の多くは、「たったいま」ではなく「将来」必要になる力として位置づけられている。つまり、おとなになって職を得て、お金を稼ぐために、一定の能力・技能・知識を身につけていなければならない。それが小学校、中学校、高校、大学、大学院という学校システムの上に順次積み上げられる。そうして「将来」に照準を合わせたところで必要になる力が、節目節目で、どこまで身についたか、試験で確かめられる。

このところで力と生活との間に、ある倒錯が忍び込む。たとえば現代の国際化社会を生き抜くためには英語での読み書き、会話くらいはできなければということで、中学校から英語教育がなされ、これが中等教育の重要な位置を占めてきた。いまはさらに小学校段階で英語に慣れ親しむ機会を持ち込もうとしている。そうして子どもたちが、「将来」必要になる大事な力として熱心に英語を学ぶ。ところが十年ほどもそうした学習を重ねたあげく、いよいよ問題のその将来になってみれば、この力を生活のなかで使いこなせるおとなは、数えるほどしかいない。それもそのはず、いくら将来のためにと行って身につけたつもりでいても、その力は試験に使うだけ、生活のなかで使われることがない。生活のなかで使われない力が、生活に根を下ろすはずがない。

リハビリの世界で「廃用の原則」として言われるとおり、使われない力は衰える。教室でただ身につけて試験で発揮しただけの力は、その試験という「用」が終わったところで、ただちに剥がれ落ちる。じっさい高校入試、大学入試で膨大な量の知識・技能を覚えたはずなのに、それが終わって一年もすれば、その大半が身から剥落しているのに気づく。

この倒錯は、私たちにとってあまりにお馴染みで、これをもはや倒錯としてさえ意識しなくなっている。しかし制度の枠のなかで正当化されてはいても、なお倒錯であることに違いはない。現に子どもたちの多くは、学校も学年が上がるにつれて、そこで身につけた力が自分たちのいまの生活世界に生かされていくという実感から遠ざかり、そのかわりに将来へとつながる学校制度の梯子を意識して、そこをのぼるために

は、自分たちのいまの生活をいったん横において、とにかく学ばざるをえないのだと観念していく。

昨今の学力論争で議論されている「基礎学力」や「生きる力」が、はたして身につけた力をいまの生活世界に組み込んで、その子どもの世界を豊かにするものになっているのか、むしろ「将来」のためにと言いつつ、結局は子どもたちを制度の梯子に押し込み、②空しい学びを強いるだけのものになっていないか。ここに学びにかかわる深刻な錯覚が入り込んでいることを再考せずして、ただただ学力を身につけられるよう支援すればよいなどというものではない。

出典：浜田寿美男『子ども学序説』2009年、岩波書店、
pp. 104-106（設問の都合により本文の一部を改変している）

（問1）下線部①「力と生活との間に、ある倒錯が忍び込む」とあるが、「力と生活との」「倒錯」とはどういうことか。「目的」という言葉を必ず用い、書き出しを「本来、」として、「本来、」を含めて80字以上110字以内で説明しなさい。なお、「倒錯」とは、「逆になること」という意味である。

（問2）下線部②「空しい学び」ではない、「豊かな学び」について、あなたのこれまでの学びの経験（※）から具体例を挙げ、その経験がなぜ「豊かな学び」といえるのか、また、あなたは教育者として、その経験をどのように生かしていきたいか、300字以上400字以内で具体的に答えなさい。

※教科の学習での経験を挙げること。生徒会活動等の特別活動や、部活動等の課外活動の経験は除外する。